

印西市会派視察

実施日：令和5年10月11日

実施場所：千葉県印西市役所

【概要】

○印西市について

令和5年に市民人口が11万人に達成したが、北側や旧市街地では人口減、中央部のニュータウンは人口増と格差が出ている。

北側の市役所がある街区とニュータウン街区の造りも完全に別物の二面性がある。地盤が固く東京 成田の中間点という地の利もあり、物流センターのグッドマンジャパンやGoogleデータセンター、Amazonデータセンターなど世界的な企業が拠点を置いている。

日本医科大学千葉北総病院

ドクターヘリが2機あり、基地病院になっている。TVドラマの「コードブルー」のロケ地にもなった。

箱根駅伝の常連校の順天堂大学さくらキャンパスがあり、オリンピック選手を多く輩出している。

市の財政力

財政力指数は1を超えている。経常収支比率86%前後。公債費比率も1%以下。

多くの企業が入っているので企業法人税や固定資産の税収入が高い。

市債の内訳として、学校給食センター作ったため44%増。

民生費：民間保育への支出などが2.1%増の171億 衛生費：61億
健康子ども部歳出予算

民間保育への委託、運営費支援事業、母子衛生費（伴走型支援）などが増。

○いんざい子育てプランについて

「子どもが健やかに育ち 安心して子育てできるまち」時代と共に子育てニーズも変化している。第2期は令和6年までの計画なので、第3期子ども子育て支援プランをプロポーザルで公募したところ。

市民アンケート

住みやすさは？ 77%が肯定的回答。

自然が多く、治安が良い。買い物が便利（33.3%）。

住みにくさは？ 買い物がしにくい（46.6%）。同世代の子どもが少ない、医療機関が整っていない。

新旧市街地によって格差があるのが現状。

買い物や通院などは、免許返納した旧市街の高齢者は難しいが、車を持っているニュータウンの子育て世代は「しやすい」と答える。

質疑応答

Q：どの市町村でも働き世代を欲しがっているが、勝ち組の印西市の魅力は何か？

A：・千葉ニュータウン整備でコストコやジョイフルホンダやイオンモールなど買い物便利。

- ・公園が大きく歩道が広い。自然が多い。
- ・電車は東京40分、成田は13分で行ける。
- ・職住近接である
- ・3000万円台で駅近くの家が手に入り、子育て世代が流入しやすい

Q：新旧エリアちがいで地域性の違いは？

A：・小学校18校あるが、1学年10人の所もあれば、200人の学校もある。
・多いエリアは学校を建てても建てても足りない状況。
・学童保育2施設、3施設と増やしている。以前は76人いたが令和4年以降で待機児童はゼロとなった。

Q：平成28年から開始した男性不妊治療への助成の実績や評判はどうであるのか、男性不妊治療の効果は？

A：平成29年、30年、令和1年で1人ずつの3人が実績。

Q：子ども向けショートステイサービスとは？

A：施設や里親の所で連続7日間。1日2歳未満で所得により違うが1,100円～5,350円、2歳以上は1,000～2,750円、生活保護世帯は無料。

Q：子育てが困難な場合一時的に預ける「ショートステイ」や家事育児の支援をする「子育てヘルプサービス」の事業の目的とは。

A：妊産婦や保護者の精神的負担の軽減を図る。

Q：子育て支援の質を向上させるためには、保育士や子育て支援員などの人材の確保・育成や、子育て支援情報の充実などが必要だと考えるが、これらの取り組み、課題等について。

A：保育士：民間保育園への処遇改善補助金で離職を防ぐ。

待機児童対策：18施設を誘致設置した半面、保育士の確保が課題。

5年間で私営18の保育園を作った。それぞれ頑張ってもらったが、公設公営の職員も必要なので正直先生の取り合いになっている。民間では退職する方も多く、先生の定員割れも起きる。保育系の学校に行くと、新卒

の先生を集めたりしている。現在ギリギリで運営。子ども誰でも通園制度も始まったが、定員ピッタリでキャパ余裕なし。

Q：保育士への処遇補助は？

A：処遇改善として120時間勤務で4万円支給している（県から1万円/市から3万円）。令和4年実績33の施設559名に交付（2億3,376万円）。

Q：地域全体で子育てを支えるためには、地域の民間団体や企業などとの連携が重要だと考えるが、地域の民間団体や企業がどのような子育て支援活動を行っているのか域全体で子育てを育てるならば民間との協働が大事だか状況は？

A：特になし。「チーパスカード（県）」を見せるとお店で割引があり、印西市内で114の店が協賛している。

Q：今後の子ども・子育て支援の展望について、どのような子ども・子育て支援を進めていくのか。今後の子育て支援の展望は？

A：基本計画に定められた通り、環境づくりを進める。

Q：伊勢原でも土地区画整理があり、そういうニュータウンは人口増えたが、他所は減った。健康や子ども施策で人口を増やすのは難しいと考えるが、どうやって子育て施策が効いてくるのか？

A：千葉ニュータウンは高層マンションなどが分譲され、若い世帯が入ってきた。戸建ても安い。若者流入 子どもが生まれる サービスが増えると好循環が回った。ニュータウン中央はマンション系が多いが、牧之原側は戸建てが増えてきており、一気に増えた（5年で1万人増えた）が、学童や保育園の問題が起きている。

逆に、旧市街地は若い世代が外に出てしまい寂しい。保育園や学童も入りやすく、ニュータウンとは真逆の状況。若い世代は東京の家を売って引っ越してくる方もいる。道も土地も広く、障がいを持っている方のバリアフリーの家を求めるニーズにもこたえられる一方、10か所の避難所の中には急傾斜地の場所もある。

ニュータウンは地盤が強固であるので多くの企業のデータセンターがやってくる。ニュータウンエリアの家は3,000万円代（月7万くらいの返済）がメインで買いやすい。中には4~5,000万円の所もあるが、旧市街地は1,500万円程度で購入できる。

【所感】

千葉県印西市は、令和5年時点で人口10万人を超え、千葉県内の自治体で最も人口の増加率が高い自治体です。その要因の一つは、子育て支援政策の充実によるものです。子育て世代が安心して暮らせる環境が整い、人口増加につながったと考えられます。具体的には、保育園の待機児童ゼロにより、子育て世代が仕事と育児を両立しやすくなりました。また、子育て支援センターの充実により、子育てに関する情報や相談を受けられる場所が増えました。さらに、子育てに関する講座やイベントの開催により、子育てに関する知識やスキルを身につけやすくなりました。他にも、子育て世帯への支援金や助成金の支給により、子育てにかかる経済的負担が軽減されることや、印西市は自然豊かな環境や、東京へのアクセスの良さなどの魅力もあります。これらの魅力も、子育て世代の移住や定住を促進する要因となっていると考え、今回の視察先に決定させていただきました。

「千葉ニュータウン」の事業期間は昭和44年から平成26年までで、ここに印西市人口の約半分が住んでいます。前記した人口増加の要因が「子育て支援政策」によるものかどうかは明確ではありません。平成27年から始まった「子ども子育て支援事業計画」が、人口増加に対応して導入されたのか、それ以前から積極的に行われていたのかについての詳細はつかめませんでした。また、現在の伊勢原市の人口維持において、土地区画整理事業が重要な要因であることは間違いありません。一部の地域で人口が増加し、他の地域では減少している状況が本市にも印西市にもあります。明石市のように、子育て政策によって明確な成果を出すことができるか、今後の課題は残りました。また、印西市には、保育士とバス運転手の確保に関して、18の保育園建設において確保が難しく、補助金交付や処遇改善の補助が行われていますが、問題が解決しきれていない状況があります。地域ごとの特性やニーズに対応するため対策が求められているそうです。さらに、当日の質問により、千葉ニュータウンの魅力や地域ごとの特性、不妊治療や子育て支援の詳細、子育てコンシェルジュの活用、企業との連携などが明らかになりました。本市の子育て施策に活かせるものが多数ありましたので、活かしてまいりたいと考えます。

急激な子育て世代の流入により、保育所をここ5年間で18箇所新設し待機児童ゼロを達成。また、学童保育にも力を入れ、受け入れ強化を継続しているとそうだが、児童生徒の受け入れはギリギリであり何とか運営出来ている状況。そういった中、子どもの受け入れ体制構築における問題は保育士・教員の確保であり、保育士・教員の取り合いのような状況が生まれてしまっているのが悩みとの事。

全国的に働き手不足が顕著になってきており、保育士・教員も例外ではない。印西市においても福祉系学生のリクルート実施や、月に120時間以上の就労を条件に市より3万円/県より1万円の合計4万円を支給するなど、市には危機感と実行力が伴っている。

印西市では激増した子育て世代に急ぎ対応せざるを得ない状況であり、職員確保に奔走しているとも言えるが、伊勢原市においても今後はより一層の積極的な保育士や教員などの人材確保が必要と感じた。

彼らは未来の子ども達を守り育てる現場を支える貴重な存在であると同時に、一人ひとりの大切な市民にもなりうる存在で、伊勢原市で働く事に魅力を感じ定住して頂けるように誘導する事も必要ではないだろうか？業界として中々上がらない賃金の低さや、それに伴う住居費支出への苦しさに対して市がサポート（就労助成金や安価に抑えた住宅の提供など）する等、保育教育の人材確保に対して攻めの姿勢を行政は持つべきと思う。全国引手あまたの状況において、保育教育の現場においても都市間競争は始まっていると感じた。

専門性をもった就労者や定住市民という「人財」が増える良いサイクルを、市行政のリードにより生み出すよう取り組んでゆきたい。

全国的に人口減少が深刻となる近年、千葉県北西部と茨城県南西部には現在子育て世代が移り住み、人口が増える全国屈指の自治体が集まっている。日本人の人口増加率が全国の市でトップだったのが、印西市で1.89%と前年まで6年連続1位だった流山市を抜くこととなった。今回、ご縁があって印西市を視察する機会を我が会派に与えられたのだが、なぜ人々が印西市に住みたいのかぜひ調査してみたいと思った。

視察して感じたことが、子育て世代、働き盛り世代が求める要素が集まっていた。自然豊かな環境、子どもを遊ばせられる広い公園、ベビーカーや車いすにやさしい広くてフラットな歩道、買い物に便利なショッピングセンターの数々、グローバル企業が集中するエリア、そして手ごろな価格の住宅環境が極めつけである。

ただ、急激な人口増加に対応するために、学校、保育所や学童保育などを増やすなど行政は後追いでサービス提供しており、市側の余裕のなさも感じた。特に深刻なのは保育士などの人材確保である。市独自で保育士一人当たり月4万円の助成を行うのは人材調達のための策であるが、年間2億円を超える予算をつぎ込んでい、つぎ込める印西市の財政力に感服した。子育てサービスを充実させるには、それ相当の子育て予算が必要だが、グーグルなどの国際有力企業を集め、安定した歳入確保に努めているからこそできることだと感じた。

視察後、「子育て短期支援事業ショートステイ」について詳細を印西市子育て支援課に問い合わせたが、千葉県の里親制度を利用して印西市在住の里親に協力をいただいていることを確認した。里親制度は国県の事業だが、県から市内里親登録者の情報をいただいて、市の独自事業に使える制度はぜひ神奈川県も取り入れるべきだと感じた。ショートステイは概ね1週間程度だが、主に母親の病気が理由で利用することだった。核家族が大勢を占める昨今、こういったセーフティネットがあるということは、子育てファミリーにとって大変心強い。本市でもさらなる子育て世代へのセーフティネット強化を進めるべきだと感じた。

○健康施策「ちょきん運動」

【概要】

背景と目的

・高齢者人口も平成22年の7,583人から令和5年で14,886人と倍増した。印西市はエリアによって高齢化率が大きく率が違う。50%を超えるところもあれば、ニュータウンエリアのように10%以下の所もある。高齢社会は、介護保険サービスだけでなくご近所友人やNPOとタッグを組んで支えあうものであり、自助・互助・共助・公助のバランスが大切と考える。

・ちょきん運動を通じて、市民のネットワークを強化したい。

・人との関わりがあると要介護状態になりにくい。週1~2回の活動に対して、それ以上の間隔になると一気に数値が悪化してしまうので、週1以上の活動が望ましいと考える。

・ちょきん運動はあくまで「自主活動」で、週一回同じ曜日同じ時間同じ場所にあつまりグループ活動する。住民の方が主体となって参加者全員で話し合い相談しながら行い、誰か1人が大変な思いをしないようにする。

なぜ自主活動か？

自ら「活動したい」という意欲があると活動継続や取り組み効果が高い。
地域の繋がりや地域の力を損なわないように市は後方支援に徹する
市主催では会場までの移動や定員に限りがあり、すべてに行き届かない。
78グループ約1,300人が参加している

ちょきん運動とは？

自己決定：ちょきん運動の活動について知ってもらい参加するかどうか決める。

自己管理：実施前の体調確認（体温。血圧等の確認）と運動の記録をつける

おもりが無い状態から始め、200gのおもり（最大6本）をバンドで手足につける。実際にやってみた後、「A楽/B普通/Cきつい」とランクを定め、Aだったら次から1本増やす等、自主管理する。

最初は市がサポートするが、徐々に自主活動に移行してゆく。

ちょきん運動が目指すもの

健康づくり：健康を高める

地域づくり：活気と団結力を高める。地域のつながりを強め、困っていることがあればお互いに助け合う。

質疑応答

Q：ラジオ体操と比較してどう違うのか？

A：体操と違い、筋力運動なのでピンポイントで鍛える事ができる。

ラジオ体操と違いちょきん運動は1時間程度なのでおしゃべりしながら活動できる。また、運動しながら歌うので脳活性ができるし、バンドを装着するときに指先の運動にもなる。

Q：地域にどのように貢献しているか？

A：支えあい見守り防犯に貢献してる。この活動を始めたら、他の市の取り組みにも関心をもってもらえるようになった。

Q：譲れない点は？

A：1週間に一度以上で効果がでるので、毎週1回以上やってもらう。

Q：事の発端は？

A：高知県高知市でいきいき100歳体操というのがあった。

Q：どう継続するのか？リーダー役は？

A：「全員でやってください」とおすすめている。1人の方に集中して負担と感
じないように、工夫している。やらされるのではなく、やってもらうまで待
つ。

【所感】

単純な「健康増進」以上に「地域活性化」という側面があるのが印象的であっ
た。市行政としても地域の繋がりを育てたいという強い思いがあり、現在78グル
ープ、1,300人程の参加があるが継続して民生委員や町内会と連携を深め、数
を増やし続けたいとの事である。

また、自主性を持った意欲を持つ事により、活動継続や取り組み効果も高まり、
地域の繋がりを高める効果もあると感じた。

実際、活動時に参加者がお互いを気遣い合い、詐欺の電話情報などを共有しあっ
たりする事が自然発生的に生まれ、支えあい/見守り/防犯の効果が出ているとい
う事であり、非常に重要な役割を果たしている。

人との関わりがあると要介護状態になりにくく、医療費低減の効果も当然狙える
訳だが、「元気な方だけでなく、認知症の方も参加して欲しい」という印西市の説
明からは、「認知症の方を地域で把握して守って欲しい」という思いもあると感じ
た。

超高齢人口減少社会においては介護保険サービスや一部のNPO法人だけでなく、ご
近所友人とタッグを組んで支えあう事が必要であり、自助互助共助公助のバランス
が大切と考える。

地域のつながりを強め、困っていることをお互いに助け合うように誘導する事が伊勢原においても有効である。予算そのものも廉価でありながら大変多くの副次効果があり、大変興味深い活動であった。

千葉県印西市の「健康ちょきん運動」は、住み慣れた地域で、健康づくり・地域づくりを目的とした住民主体の運動です。誰にでもできる簡単な運動で、おもりとバンドを使って筋力運動を行います。この運動は、市民の健康に以下のような影響を与えているとされています。

【筋力や体力の向上】おもりやバンドを使って筋力運動を行うことで、筋力や体力が向上します。筋力や体力が向上すると、日常生活の動作が楽になり、転倒などのリスクを軽減することができます。

【介護予防】筋力や体力が向上することで、介護予防にも効果的です。筋力や体力が低下すると、要介護状態になるリスクが高くなりますが、健康ちょきん運動によって筋力や体力を維持することで、介護予防につながります。

【社会参加の促進】地域の住民が集まって運動を行うことで、社会参加が促進されます。社会参加することで、生きがいや元気が生まれ、健康維持にも効果的です。健康ちょきん運動は、地域包括ケアシステムの一環として、高知県高知市の「いきいき百歳体操」および岡山県津山市「めざせ元気！！こけないからだ講座」を参考に、自治会、民生委員、個人などが主体となって、新興住宅地に住む住民を対象に、筋力トレーニングを行う活動が行われています。この活動は、ラジオ体操とは異なり、ちょきん運動と呼ばれ、歌を歌いながら行うため、脳のトレーニングにもなります。参加者は社会参加と人とのつながりを強化し、地域への貢献を重視し、支え合い、見守り、防犯防災に貢献しています。しかし、運動メインの人もあり、健康と地域づくりの意識向上が求められます。また、グループ数が78もあるため、組織と調整に工夫が必要で、体操クラブやエアロビクスなどのリーダー不足が課題とされています。連絡係のような役割は存在しますが、参加者の自発的な活動への参加を奨励し、後方支援も提供しています。視察の報告をしていただいた職員の皆様の熱意が伝わわり、本気健康施策だと実感致しました。今後本市の健康施策に取り入れていただきたいと思います。

印西市は、子育て世代が多く住み高齢化率も低く若い自治体だという印象を持って訪問したが、地域によっては高齢化率50%を超える地域もあり地域差が非常にある。また、今子育て世代と言われている方々も20年後30年後には高齢者の仲間入りになるため、一気に高齢化が進む可能性もあり、今から健康寿命を延伸する取り組みは必要不可欠になる。

印西市が「ちょきん運動」というユニークな健康施策を実施しているということで、今回説明を受け実際体験もさせていただけた。「ちょきん」のきんは、筋肉の

筋と貯金の金を兼ね合わせた造語であり、貯金好きの日本人には筋肉を貯めるという言葉が響き、親しみやすいネーミングだと感じた。

ちょきん運動のすばらしいところは、行政からの押し付けでなく自主活動により小グループで活動しているところである。人間やらされていると思うと長続きしないが、自ら自分たちのために行っていると頑張れるものである。私の住む地域でも大神宮の境内で年間通してラジオ体操を実施しているが、10分のラジオ体操に比べて1時間以上歌を歌いながらじっくり筋肉を使う体操を行うことがすごい。認知症予防や認知症の方の見守りにもなり、地域の絆も強まる。

現状に満足することなく、さらにちょきん運動を実施する参加者を増やそうと情熱的に動く理学療法士や保健師の資格を持つ市職員たちにも感服した。お金をあまりかけなくても市民のやる気を引き出すことにより、健康施策を拡大し健康市民を増やす取り組みが可能であることを学ぶことができた。

【視察の写真】

(左から) 森尾議員、橋田議員、印西市議会議長、安藤議員

